

遺構説明板の解説文

①天野坂から榊形虎口へ

大手口と思われる天野坂からの堀底道は、城兵が効果的に攻撃できるように工夫されている。小宮曲輪と三の丸の間には榊形虎口（出入口）が設けられていた（図の中で復元）。攻めのぼる敵側にとっては大変な脅威にさらされる場所で、侵入するのが難しかったと思われる。

②小宮曲輪（家臣屋敷）

「小宮曲輪」と称されてきているので、氏照の家臣の中に西多摩地域出身の家臣（小宮氏）が活躍していたと思われる。小宮曲輪の内部は土塁（土盛り）でいくつかの屋敷に区切られていたと考えられる。小宮曲輪と三の丸との間には榊形虎口（出入口）があったが、車道により消滅した（図の中で復元）。



③小宮曲輪榊形虎口（北の備え）

山の神曲輪方面から小宮曲輪へと攻め進むには、榊形虎口（出入口）を通過しなければならない。敵は狭い通路を一列縦隊にならざるを得ない。それに対して城兵は、敵の頭上や側面から弓矢、槍、鉄砲で攻撃する。敵にとっては手ごわい場所に攻め入ることになる。

④山の神曲輪（民衆の避難場所と推定される）

「山の神」とは全国各地に残る民間信仰で、農耕の神である。春は里に下り、秋は収穫を見守ると再び山に戻って行く。この山の神を祀る山の神曲輪は、城下や周辺村々の民衆たちを、敵の乱取り（放火や略奪）から守るために設けた避難場所であったと考えられる。永禄12年（1569年）、城周辺の村々は武田軍（武田信玄）によって焼き払われた。このとき、一般民衆は領主の城（滝山城）へ避難していたと思われる。

⑤コの字形土橋（強力な側面攻撃）

堀を掘る際に、一部を土のままに残して通路として使う場所を土橋という。当時はもっと狭く、敵方の侵攻に対して4回も体の向きを変えて進ませ、側面攻撃ができるように工夫していた。敵の直進を防ぐための土橋であり、大変貴重な城郭遺構である。

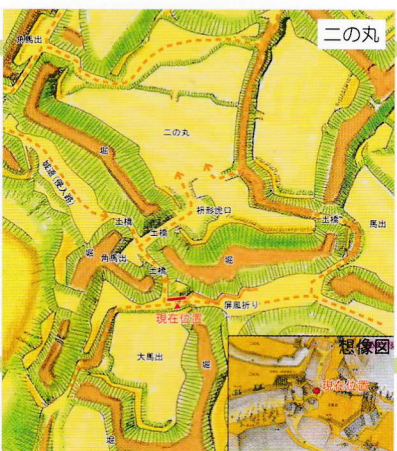
⑥馬出（少人数で守れる出入口前の防御設備）

虎口（出入口）の前方に設けた空間を馬出という。この場合は方形に作られていることから「角馬出」と呼ばれている。馬出があることによって大変堅固な守りとなり、守備する城兵の出撃も容易である。二の丸の3ヶ所の出入口には馬出がそれぞれ設けられている。

⑦弁天池跡

（宴を楽しむような池と推定される）

眼下には中の島と池跡が見える。実は、氏照の弟、氏邦の鉢形城（埼玉県寄居町）にも中の島があり、その池を「弁天池」と呼んでいた。今は、池をせき止める土手は分断されているが、当時はつながっていて湧水や雨水を溜めていた。小舟を浮かべて宴を楽しむような池だったと思われる。



⑧二の丸（集中防御）

滝山城で最も防御性が優れているのが二の丸である。3ヶ所の出入口にはすべて